

[通気×雨仕舞い] いまさら再入門



今回は①②③の箇所の施工のポイントを解説する

第3回 軒先換気と けらば水切りの施工

前回に続き、軒やけらばの出が少ない建物における屋根通気を扱う。今回は全体像をお伝えしたが、現場をつぶさに追う機会を得たので、今回は施工の手順や細部の納まりのポイントについてお伝えする。

取材・構成：大菅 力
協力：ハウゼコ
齋藤組
大友

屋根換気は軒先から空気を取り入れて棟から抜くのが基本になる。原理は単純だが、十分な換気量の確保と雨仕舞いを確実に両立させるには、正しい設計と換気部材の選定、正確な施工が必要となってくる。特に軒の出が少なかったり、屋根形状が複雑になって各部位との取り合いが増えてくると、現場でどのように納めていくかということが大事になってくる。

換気部材や水切りの施工は屋根屋か板金屋が担当するが、屋根葺き材の施工と換気部材などの施工が別の職人になる場合、納まりによって施工手順などが変わるので、管理者が能動的に動いて、三者でよく確認をしておく必要がある。

通気不良による結露事例が増加

今回紹介する軒先換気部材は、取り付け自体は特に難しいところはない。強いて言えば段取りとして下葺き材の施工が先になるので、軒先換気部材を取り付ける際、下葺き材をめくり上げて野地板に釘留めし、その後下葺き材を再度軒先換気部材に被せることくらいだ。

問題は事例のように屋根の形が複雑になる場合だ。事例では軒先換気部材とけらば水切りが入隅で取り合うため、軒先換気部材の端部を塞ぐための役物の取り付け方に工夫が必要になる。

設計上はこうしたイレギュラーな箇所がなるべく生じないように標準化すると同時に、イレギュラーな納まりが発生する箇所は図面の段階で抽出し、職人と打ち合わせが可能なタイミングを図って現場に赴くべきだろう。



写真上：軒先換気部材の納まり。軒先の出が小さくなると、納まりの工夫が必要になる
写真中：軒先換気部材を下側から見たところ。水を切りつつ、換気が取れる形状になっている
写真下：けらば水切りと軒先換気部材の取り合い。屋根のカタチが複雑になると納まりに工夫が必要になる

